

## 鳩木節子の後日

甘木数彦

### 第二章

—

飯くら井での仕事は、節子が思っていた以上にのんびりとしていた。第一に客があまり来ない。確かに商品の梱包や発送作業はあったが、一日のうちせいぜい二時間といったところだ。他の時間はぼんやりとレジ前の椅子に座っていることが多い。けっきょく主な仕事は香奈の話し相手だった。

その日、節子は椅子に座って香奈が作ったというカタログを眺めていた。それぞれの仮面に詳細な解説が付けられている。

香奈は節子の目の前で、陳列された仮面にハタキをかけていた。くると輪を描いてまとめた髪が、手の動きに合わせて揺れている。

「そういえば化けネコ知ってる？」

香奈の手が止まる。

「化けネコ、ですか？ 知りません」

「だよ。いや城山さんが見たって噂になってさ」

「えっと花屋さんでしたっけ？」

香奈の説明では、夜中に店の前で大型犬ほどもある猫を見たということだった。猫はしばらく花屋の主を見ていたが、やがて振り返ると走り去ってしまったらしい。

「でもね。あの人ほら、ハツタリかますじゃない？ って知らないか」

節子は曖昧に笑ったが、内心では嫌な予感がしていた。

店の前で一台のミニワゴンが停まり、店内に汽一郎が入ってきた。汽一郎は二十代後半くらいに見える。伊助ほどではないが、痩せていて背が高い。伸び気味の髪とまばらに生えた無精ヒゲはどちらも根本まで色が薄い。

「うわ、路駐サイアク」

汽一郎は香奈の言葉へ露骨に顔をしかめた。

「出かけるから、ついでの用事がないかわざわざ聞きに寄ってやったのに」

「うっそほんと？ ちょうど速達で出して欲しかった荷物があるんだよね」

言うなり香奈は三階を目指して階段を上っていく。汽一郎はその後ろ姿を見送ると、溜息混じりに笑った。

「どう？ ここには慣れた？ あいつ人使い荒いだろ」

汽一郎の言葉を節子は慌てて否定する。

「まあ、さすがに女の子には優しいのかもな。でも気を付けろよ。いつ本性を現わすか。この前もパソコンがどうしたこうしたでコキ使われたって羽村がボヤいてたしな」

「あの、羽村さんとはお知り合いなんですか？」

「知り合いどころか。俺があいつの生活用品やら食料やらを買ってきてやってるんだ。じゃなきゃあいつはあの部屋から出られずに、とっくに死んでる」

「誰が死んでるって？」

言いながら小包を抱えた香奈が階段を降りてくる。

「お前だよお前」

「失礼な！　じゃこれ、お願い」

香奈は汽一郎に小包を渡す。

「そういえば、化けネコって知ってるか？」

立ち去ろうとした汽一郎は足を止めて尋ねた。二人はうなづく。

「つまり化けネコが出たって話なんだけど」

また二人はうなづく。

「おかしいな。さっきのことだぞ」

「さっき？」

香奈が声を挙げる。

「ほら。やっぱり知らないじゃないか」

「いや知ってたって。城山さんがこの前、夜中に見たって」

「あの人、平気で嘘つくしなあ」

「じゃあ、あんたは誰から聞いたの」

「勝平さんのおふくろ」

香奈は黙ってしまった。布団屋の主人である勝平の母はおとなしく真面目で、嘘や冗談でそんなことを言うような人ではなかったのだ。

「で、どんな話なのさ」

汽一郎の話は、香奈が話したものとまるで違っていた。勝平の母が目撃した化け猫は店の裏手にある自宅の郵便受けの中にいた。手紙が来ていないか確かめるために郵便受けを開けると、何匹もの猫が融合したような怪物が飛び出して走り去ったというのだ。手をかすめたその毛は人間の髪とそっくりな感触だったらしい。

自分が仕入れた話を披露する香奈の隣で、節子は不安が重さを増し、胃の腑に満ちるのを感じていた。明らかによくない兆候だった。

正体不明の組織、通称ヨ号組織が行う活動の一つに、うわさ話を利用するというものがあった。

ある日、ごく狭い地域や社会にうわさ話が次々と流布する。それは同じものについての話なのだが、中身はどれも違う内容だった。ちょうど香奈の聞いた話と汽一郎の聞いた話が同じ化け猫の話でも中身が違うように。

こうした活動はヨ号組織にしては珍しく、戦いの全期間を通してたびたび遭遇した。それは何か組織にとって重要な意味があるらしいのだが、それ以上のことは最後まで解らなかった。

節子や伊助たちはこうした事態を察知すると、まずすみやかに噂の封鎖を行った。放置すれば影響を受ける範囲は噂の伝播に伴ってどんどん拡がり、強大化する。

いつも最終的には事態を収拾できていたのだが、常に解決されない根本的な謎があった。実際のところ、組織がそうした事態全体の中でどういう役割を果たしているのかが不明なのだ。

噂をねつ造して広めているわけではない。伝播を助けているわけでもない。事態の黒幕として組織の誰かが出てきて、勝負を挑んでくるわけでもない。その発生から収束まで、組織の構成員はまったく姿や痕跡を見せない。

それでもそれが組織の活動の一環だと判るのは、人知を越えた不可解さが組織の活動内容全てに共通するものだからだ。あるときなどは全然別の件で構成員を抹殺したところ、噂の蔓延が終息したことさえある。彼らは決して、単純な破壊工作や暗殺などは行わない。

そもそも意図すら不明な場合が多い。未解明ながらも情報技学というものが重要な役割を果たしているそうなのだが、「観察参与」だの「主観のマクロ局面における自己成就的な振る舞い」だの、節子にはそれがどんなものなのか、説明されても理解できなかった。

だが、化け猫の噂が組織の活動であるはずはなかった。たしかに節子はその手で組織を壊滅させたのだ。最後に登場した首領の死は節子も確認したし、節子はその所在すら知らない、政府系の研究所でも確認されていた。

もしそれが勘違いだとしたら。どこかに残党が残っていたら。絶対にないとは言い切れないが、やはりそれはしないような気がした。構成員が残っているうちに首領が出てくるだろうか。残党がいても、これほど早く活動再開はしないだろう。

そのとき節子の頭に一つの考えが浮かんだ。もともと噂を利用した活動にどう組織が関わっているのかは不明だ。ひょっとしたらそれはリアルタイムでなくとも可能なのかも思えない。噂が組織の仕業だとしても、それは時限爆弾や不発弾のようなものではないか。

そこで節子は香奈から名前を呼ばれ、我に返った。

「どうしたの？」

「いえ。なんでもありません」

答えながら、節子は自分が活気づいているのを感じた。久々に熱中できるものを見つけたからではない。それはこれまでの反復から来る自動的な反射だった。意識しなくとも意欲を高められるくらいでないと、とてもじゃないが組織相手には戦ってられなかったのだ。

だから活気づく自分に、うんざりしている部分もあった。自分がまるで、燃料を得てあさましく稼働する機械のように思えたのだ。

汽一郎が出て行くと、店内はまた静かになった。香奈は再び仮面へ八タキをかけはじめ一言も喋らない。節子はカタログに没頭しながらも、自分の中で条件付けられた意欲や思考といった使命達成のためのもろもろ一式が徐々に回転数を上げるのを感じていた。

提供：ハムカツ屋

<http://www.hamkatsuya.com/>